

## 旅愁抄

一

「たとい大千世界にみたらん火をもすぎゆきて、

仏の御名をきくひとは、ながく不退にかなうなり。」

わが旅は一筋に生き抜いて、自然なる仏の御名告を聞かんがための旅である。八風吹きすきんで人生行路の波高く、五濁の泥濘でいねいにおぼれて、悲愁の声、哀れである。虚仮ちまたそらごとしげくして、群賊悪獣の声、巷ちまたに満つるに、ひとすじの道、現前脚下にあらわれてわずかに生きることを得せしめたまうのである。

「野ざらしを心に風のしむ身かな」(芭蕉)

これは芭蕉のいわゆる「野ざらし紀行」の中の一番初めの句である。芭蕉は四十一歳の秋、門人の千里ちりを伴って江戸深川の草庵を出て、はじめて、九ヶ月にわたる野ざらしの旅にいたのであった。東海道から伊勢路に入り、外宮げぐうに詣もつで、やがて、故郷に帰り、去年ゆきし母の遺髪を拝して

「手に取らば消えん涙ぞあつき秋の霜」

と泣いた。それから、大和路を行脚あんぎゃし、吉野に入り、つきつきと古い歴史の里を巡つて後、木曾路、甲斐を通つて江戸に帰つたのである。この旅は芭蕉にとつては自身を野ざらしにする覚悟の旅であつて、この野ざらしの旅において芭蕉は、

「死にもせぬ旅寝のはてよ秋のくれ」とわびた。

「侘わび人われさえあわれにおぼえける」

中にも、だんだん広い世界に出ることができるようとはしなかつた。彼は野ざらしを覚悟の旅において、彼と古人とのつながりを涙の体験において発見した。

かくして、彼は最後まで旅人でおわつた。私は旅人芭蕉に心をひかれる。旅人である私の前にあるものは、自然の山川草木と人とである。であるから、私の旅は自然の山川草木と人への巡礼である。

人は時に悪逆を行ない、醜悪なる言で人を傷つけるのに、何故にかくまでに懐かしいのであるか。時には虎狼のごとくかみつき、毒蛇よりも怖ろしきものであるのに、何故これほどまでに私を引きつけるのであるか。大自然の大地を歩みつつ、人を求めて旅に生きる。わが心のあわれに悲しくはかなく愁いの深いのはなぜであるか。

またこの旅においてはほのかではあるが、底なき喜びと満足を獲ることができるのは、何故であろうか。悲愁と喜悦との一体なる旅心、それはただみ親の招喚のみ声によつて開かれる信心の、その信心の感ずる具体的な人生の永遠の今の相である。

私にとつては、悲愁と喜悦とは具体的な人生それ自体である。

天、われをあわれみ恵んで、今日御正忌お逮夜たいやの十五日、外には雪花がちらついている。

「雪を見れば祖聖を憶い、故郷を念う」。

故郷を離れてお念仏の旅路にあつて三十年、来る年も、来る冬も憶いつづけたこの念いである。

雪の聖者、旅の聖者に、今日雪の散華こそいともふさわしい莊嚴である。

藤原の家より比叡山に、さらに比叡の山より人生に隱遁したまいて、念仏に帰し、配流を縁として、荒野に悩む群萌の大地に旅路を選びたまいてより、田夫野人の友となり、櫛風しつふう沐雨もくう、浮きふししげき人生行路の喜怒哀楽を内に転じて、必墮無間、愚禿親鸞と悲泣し、そこに流れたもう大悲本弘誓願に覚めて念仏したもうた。

噫あゐ、五濁悪世の煩惱業苦をそのままに、荷負して生きぬきたもう白道は、白妙の雪よりも清白に、ただ一筋にただ一筋に、静かにお浄土に帰りたいもうた。その九十年のご生涯、今日はその地上最後の御一夜、涙なくして今日を過すごし得るであろうか。仏天、我をあわれみて、雪を降ふらせたもう。

噫あゐ、聖人ましまさずば僣慢邪見悪逆懈怠なるわれは、ついに地上に一人の師を得ることなく、一人の善知識に遇うことなく、あわれ永劫の流転を流転とも知らず、無意義に人生を空過するところであつた。一人の善知識なき無人空廻の大砂漠に旅する私であつた。しかるに幸いなる哉、この流転の旅路において、私は誠にたまたま聖人の化導によつて法蔵因位の本誓を聞くことが出来た。我が一生は如来聖人の真実教を聞信させていただくための一生であつた。ただこの事一つのための一生であつた。

頭をあげて行く手を見れば、見よ、聖人の前に法然上人あり、源信あり、善導あり、道綽あり、曇鸞あり天親あり、竜樹あり、釈尊あり、それをかこんで億々の念仏行者あり、皆永遠の道を歩んでいられるではないか。それらの踏みかため聞き躰とましたまいし大道に、われもまた出されたのであつた。たった一つの道、本願の道、念仏すれば、火の中にも水の中にも、この道のみが常に現前したもうではないか。

今日、御正忌、いよいよ私には厳かなみ声が聞こえる。行かねばならぬ。歩まねばならぬ。いよいよ純粹にあのみ声を聞いて歩まねばならない。恐ろしいのか、嬉しいのか。深い感動が私の胸に満ちわたる。「聖人よありがとうございます。九十年の悲願一道の御旅路は、私一人のためのご苦勞でございました。ほのかに私の胸底に光りたまうみ光、それは聖人のご苦勞のすべてによつて点とまされたものであります」。

外には雪が降っている。広間にはお念仏の声が聞える。一人だと泣いた旅路に、多くの人を与えられた。だが私はただ一道を、より純粹に歩ましていたただかねばならぬ。

三

旅は、悲愁に満ちたものである。しかし、この悲愁から救われる術がある。

いわく、それは、魂を麻痺まひさせることである。というより、実は、たいがいの人には麻痺しているから笑って生きてゆけるのである。しかし、この魂の麻痺の相が深くなればなるだけ、無明の病はますます重くなってくるのである。この無明の病毒によつて、悲愁を悲愁と感じなくなることを求める心、それがまた、同時にほんとうの旅を忘れる心でもある。無明の病がすこしずつうすれて、旅に旅だつ心には、麻痺からさめて、悲愁があらのままに身にしみてくる。この悲愁の旅がさらに麻痺をきますのである。かくして旅は悲愁に満ちている。しかして、私は旅人でありたいと「願」っている。(二三・四・一四 浜田顯正寺にて)

四

今日も毎日、涙の子が私の前に来る。こみいつた悲しい身の上を訴えて、人の世の矛盾に泣いて。形の上をどうしてあげようもない私である。

しかし、お念仏の教えが耳に入ると、昨日まで泣いた人が、今日はほほえんで来る。ほんとうの悲しみではなかつたのである。人はみな、正法で洗えば消える悲しみを抱いたままで、自己を肯定して立ち止まっているのである。

深い悲しみを悲しみたい。大いなる悲しみを悲しみたい。深い大いなる悲しみとは何であるか。

法蔵菩薩の御悲しみである。

大いなる悲しみにのみ、大いなる喜びがある。

深い悲しみにのみ、深い喜びがある。

五

念仏の心は、今まで人生を楽園にすることが出来もするようにならぬことを、根底から打ちくだいて、劫初より未来際にわたつて無明生死の荒涼たる大砂漠であることを自証する。しかるに、この荒涼の旅路にも、清い泉はわき、念仏の浄華は咲いている。

しかし、止まつてはならない。

さようなら感激の花よ。泉よ。

大地の果てからしきりによびたまう声が聞える。

私は新しい旅路にたたねばならない。

## 六

華嚴の賢首大師は、大乘起信論義記において、大覺、すなわち、仏にあらざる者のすべては、ただ、夢の中の諸相であるとせられた。

人生は夢である。覚めたと言うも、迷うと言うも、夢である。物思うと言うも夢見ることである。旅すると言うも夢見ることである。旅の嬉しさも夢見ることになり、旅の悲しさも夢にある。

聖徳太子は夢殿に入つて物を思いたまい、西行や芭蕉は旅に出て夢を追ひ、親鸞上人のご一生の大事は、すべて夢告によつて決せられた。

美しい夢、淋しい夢、夢の中に夢に驚き、夢の中に夢にさめ、夢の中に夢に眠る。明日の夢は雨か風か。果てしなき夢路を旅という。

「旅に病んで、夢は枯野をかけめぐる」 芭蕉

## 七

聡明な男がいた。多くの人をつれだつて、無尽の宝の国に行こうとする。途中は道が険悪であつて、人々は疲れおそれ進む気を失つた。その時、その聡明な男は、不思議力をもつて、忽然として一大城を出現し、人々に告げた。

「落胆せずともよい。この大城に入つて思うがままにいこうがよい。城内は安穩である。」と。

大衆は喜んで城中に入った。そして、心安らかに休息した。しかし、大衆はすでに、目的地に着いたかの思いをなし、もはや立ち去る意志もない。そこで、かの男は、幻作の大城を消し滅して言った。

「さあ、行こう。宝の国はま近である。」と。(法華經化城喩品)

旅人よ。化城は安息の宿場である。理想の国、真理の都、涅槃の城はま近である。歡喜の化城がこわれたと悲しまなくてもいい。旅を急げとのことである。懈慢界の化城に足をとどめていつまでも眠ることが道のごとく思えたら、心の芯のとまった時だ。願往生心は、水火の中を進む。だが化城の現われるも、化城の消えるも大慈悲の恵みである。大慈悲を体感することが旅のいのちである。

## 八

「ゆきくれて木のしたかげを宿とせば

花やこよいのあるじならまし」 平忠度

旅は悲愁にとんでいる。しかし、その悲愁の中に、あわいよろこびがあり、底なき寂しさがある。黙してゆく旅人には、時に一木一石が宿の主である。今日はここで憩わしていただき、今宵はここで一夜の宿を借る。自ら家の主ではなくて、一夜の宿を、今宵限りの宿をこう心。これがすなわち、永遠の旅人の心である。旅人にとって大事なことは、一夜の宿を借る謙虚な心である。初め来た時は旅人であり、宿人であつたものが、後になると、図々しく居ついて自ら主となり旅を忘れる。たとえ一つ家に一生住むとも、旅の心を忘れず、客人たるの心を忘れず。

「終りを慎むこと始めのごとくす」に一貫したいものである。

ただ、永遠の旅人のみが、万世の師表である。

## 九

私は次のような人を見いだした。何も言わず、誰の世話もしないでいるのに、この人が生きているために、その存在だけで多くの人が幸福であり、この人を思うだけで力を得、光を得、喜びを得る。もし、この人にしてもの言えば、それを聞いて多くの人は、道を得る。しかるにこの人をよく見れば永遠を貫くたつた一つの乗り物に乗っている。彼は、善悪を知らぬかに、人を裁かず、ただ、この乗物に乗る人の少ないことを悲しむかの如くである。彼は、この世にこの乗り物からはみ出したもののあることを知らない。

いかに波風は烈しくとも、この乗り物は、ただ、現在から現在に動いてとどまらない。

彼は、自らこの乗り物を操縦せず、方角を定めず、全我を托して不安を知らず、ただじつと過ぎゆく世相を眺めている。道とは、このたつた一つの乗り物であるらしい。

親鸞聖人いわく「しかれば大悲の願船に乗じて光明の広海に浮びぬれば、至徳の風静かに衆禍の波転ず。」と。

## 一〇

家において暮せば、何とかしのぎやすい。しかし、旅に出るとそうはいかぬ。あれがいる。これがある。たくさんに足りぬものが出る。

徳があつたり、智慧があつたりするように考えるのは、旅立たぬ人の錯覚である。

永遠の旅、死の旅、未来への旅、彼岸への旅に出発しようとする時、いかなる人も、無一物である自己を見いだすであろう。

真実教に言う悪人愚者とは、このことである。

しかし、この無一物の自己を知った時、この一念こそ、この人の大安心の定まった時であり、最も豊らかにされた時である。

この矛盾の自己同一こそ、聖人の信の（願の）内的風光であった。であるから真の旅人は、無有出離之縁の自証の大地をふまえて、願入弥陀界の帰依合掌礼に生かされるのである。

最も貧しきがゆえに、最も豊らかなのが、この旅人である。

一一

「捨」という文字はたいせつなことを表わす文字である。

長い旅をするときには、荷物を持つては続かない。行軍をするときなど、あれを捨て、これを捨て、ついには髪の毛の長いまで荷になるそうである。

菩薩が道を行ずるのもそうである。大慈大悲大喜大捨の四無量心といって、捨ててしまふ一面がないと、他の三も成り立たないのである。

それは菩薩のことで、われわれ凡夫のことではないと言うてはならない。

蓮如上人は「もろもろの雑行雑修自力の心をふり捨てて……」と教えたもうた。やっぱり捨てるのだ。名利を捨て、偽を捨て、仮を捨てて、そこに光るのが道である。道を行く者は、すなわち旅人である。

しかし、電燈が出てこなければ、ランプは捨たらない。

「全てを捨てて来い」と喚ぶ者は、太陽それ自身である。この真実それ自体こそ、私から全てを捨てしめる慧日である。しかも、捨てしめることは与えることである。

一二

われわれは、過去の経験をふりかえつて、なぜあんなことを言ったであろうか、なしたであろうかと思うことがたくさんある。それがすなわち後悔である。

しかし、一つも後悔のない人はないであろう。いにしえの聖たちのように、今日の一言が明日の遺言であり、昨日の一句が今日の辞世であった人たちは、尊い足跡を残して逝かれた人たちであるが、彼の人たちにも後悔があつたであろうか。人は後悔なしには生きられぬのではあるまいか。問題は、経験的自我の脱却ということである。親鸞聖人が横超の直道といわれたのは、いかなる人でも、経験的自我を脱却して、一念に、後悔を廻心懺悔に転成して、悔いを喜びにして下さる道があると示されたのであろう。

この経験的自我の脱却者の一言一言は、たとえ、それが一文不知の老婆の言であろうとも、彼自身の道標であるばかりでなく、歴史的意義をもつ真理の名のりである。彼は、いつ死んでも悔いのない今日を生きているであろう。

### 一三

ほんとうの登山家たちは、敬けんな心、山を拝むような心で山に登ってゆくのだと、聞いたことがある。

山を馬鹿にしたり、軽はずみに出かけてゆくと、とんだことになって、時には雪の谷底に葬られてしまつたりするということである。自己満足の陶醉にありつつ、実は全く自損そのものである心に傲慢心がある。自分では、高く高く登つたつもりでも、小山の上で肩をいからし、自分でつめだかをしているにすぎない。謙虚な心で、一步、静かに歩むものは、しらずしらずの間に高い峰にたどりついているのである。いかに急に求め急になして頭燃づねんをはらうがごとくしても、傲慢な心を見ることができないならば、この旅人は決して、高きに登ることを許されず、高きを極めることができないから、視野が狭くておのずから傲慢になるであろう。

恭敬の心（竜樹菩薩の易行道）とは、恭は謙虚の心であり、敬とは、それゆえに見えてくる高い次元の世界である。

旅人、汝よ。今日もまた、傲慢な心を凝視して、静かに歩んでゆけ。

### 一四

「旅」は「行」くものである。人は皆旅行者である。とゞまることを許されない。人生は旅である。旅であるから行かねばならない。

しかるに、この旅路には、苦楽、悲喜、矛盾、険難、恐怖等が満ちている。それ故に、快楽には執着し、苦難をば逃避して、旅路を行き貫くことを忘れる。

この旅人の歩まねばならぬ大地を現実という。人は皆、この現実の中にあり、現実の大地を離れては行歩すべき場所はない。しかるに、人は過去を回顧することが出来、又、未来を予想することが出来る。もし、過去の回想のみに生きて、現実ととりくむことが出来なければ、それは旅に疲れた老人であり、未来の想望のみあつて、過去と現実と盲目なる者は、無智の血気である。突進、暴行、犯罪、破滅が待つ。それゆえに一步一步の行歩は、過去の歴史を背負うたものでなければならぬし、未来への躍進を持たなければならぬ。前者を智慧と言ひ、後者を感情と言ふ。この二者を一ならしめるものこそ「願」である。

盗人も大和路を走ることが出来る。しかし、そこには思想も歌も詩も、何ものもない。名利の子もまた、現実の大地を忘れて人生を空過しているのである。人生空過の我をして、歴史的現実につれかえすものは、真実の教えであり、人生逃避の我をして、現実を撰取せしめるものは、信心の智慧であり、生の老衰を活かして永遠の若人たらしむるものは願である。しかし、この二者は具体的には唯一である。私にとってこの旅行とは、誠に願生、願入弥陀界の旅路のことである。

## 一五

私にとっては、今日一日はたいへん大事なものの、大切に生きさせてただかねばならぬものになつてしまつた。どうもよくよく考えてみると、体が元気で、思うさまに飛びまわっていた頃には、何やら人生そのものに大いになるところの意義があつて、しかも今日一日はいろいろなものに追われてただ多忙であつただけであつた。

人生には意義があつて、しかも今日一日は無意義に暮れていた。ところが、今のような身の上になると、朝しみじみ今日一日の命を生きさせて頂くことが有り難い。大きく人生の意義というようなことが消えて、今日一日の有り難さが心から頂ける。

先覚者たちが、仏法者に明日はないと言われたこと、わからして頂ける気がする。過去の哲人たちは心霊の美しさを發揮した人たちである。

本年はゲーテの二百年だとして、地球上の多くの人が、その詩人の哲人の偉大さを讃えている。真の哲人、詩人は、大政治家よりも、大將軍よりも偉大である。

悲しきかなや、この時にして、この尊き一日を蝸牛角上の小事に翻弄せられて、いたずらに過ぎてゆく。大いなる悩みを悩まず、大いなる喜びを喜ばず。

ただそのどうにもならぬ中にお念仏申させて頂くことである。